

脱・エネルギー輸入依存
八戸工業大学第二高等学校
普通科 2年 石橋 岬

現在、日本は海外から輸入される石油・石炭・天然ガスなどの化石燃料に大きく依存している。また、東日本大震災前後では、原子力発電所の停止により、化石燃料の依存は高まっていることがわかった。これを把握したうえで私は、化石燃料の輸入を減らすためにできることについて特に着目したい。

まず、私たちが家庭の中でできることは何か考えた。電気・エアコンなどをつけたままにしない、近場への移動は徒歩や自転車など多くの人が行っていることを思いついたが他に気になることがあった。家で天ぷらなどを揚げた時の油だ。普段、何気なく使っているこれらもエネルギーの一部なのではないかと思い、廃棄油の行方について調べてみた。使用済みの油をクッキングペーパーで漉し、不純物を取り除いたものだけを回収し、専門の工場でバイオ燃料に変換する取り組みがある。軽油の代わりに、一般のディーゼル車に利用可能であり、排気ガス内の黒煙は通常の3分の1以下であり、大気汚染の原因物質である硫黄酸化物はゼロであることもわかった。それに伴いバイオ燃料を供給できる場所が限られているなどの問題もある。だが、家庭で出る廃棄油の処理の仕方を多くの人を知り、実践することで、バイオ燃料を供給する場所が増えたり、エネルギー変換について知識を持つ人も増えたりすると思われる。そうすることで、石油などの輸入減少へ繋がると考える。

次に私が住んでいる青森県ができることとは何か。海外から買っているエネルギーを青森県内でつくることはできないのかと考えた。青森県は風・水など自然に恵まれているといえるからこそ、再生可能エネルギーをつくることができるだろう。東北電力をはじめとした電気会社は風況に恵まれた津軽地方での風力開発の動きを加速している。そのおかげで県内の6分の1にあたる約9万世帯分の電力を20年間、供給することができている。風車が立っている土地は農家から借りているため、農家と連携して一次産業を進めたり、発電事業を拡大したりして、再生可能エネルギーに強い地域になるのは遠い未来ではなさそうだ。青森県内で使われている電気のほとんどは、県内でつくり、使っているということが調べてみてわかった。そのまま、つくる量と使う量を一致させるように生活していくことが必要だと考える。

また、青森は農産物も海産物も豊富であるからこそ、食の地産地消にこだわる必要がある。県内だけでなく国内でも地産地消を意識することで、食べ物だけでなく、輸入品を運ぶための船に使うエネルギーの減少にも繋がるだろう。各発電方法のメリット、青森の特徴を最大限に生かしていけるようにバランス

のとれたエネルギーミックスがこれからの課題になる。

私たちが家庭でできること、青森県ができること、この2つに共通していることがある。どちらも、普段の生活を少しずつ変えていくことで失われるエネルギーになるか、再生可能エネルギーになるかが決まるということだ。近年、温暖化が進み寒暖差が大きくなってしまいどうしてもエアコンを長時間使いたくなくなってしまう。使ったエネルギーよりも倍の量をつくり供給されているエネルギー。寒かったら厚着するなど小さな工夫からでも少しずつ変えていくことができれば、使う量、つくる量を安定させ、発電の源となる化石燃料の輸入を減らすことができるだろう。自分一人くらい、今日くらい大丈夫と思っている人がいる限り、エネルギー問題は良くなるだろう。だからこそ、化石燃料の輸入依存から脱出するためにも私たち一人ひとりがエネルギーの使い方、処理方法などを考え、実践していくことが必要だ。

◎参考

*八戸市 <https://www.city.hachinohe.aomori.jp/>

*朝日デジタル「国内最大、青森の陸上風力、報道陣に公開」（2021年9月6日）